

高知工科大学工学部学生会員 ○山川恭敬  
 高知工科大学工学部 佐野智子  
 高知工科大学工学部正会員フェロー荒木英昭

## 1. はじめに

「一国の首都」は、文豪幸田露伴が、1899年（明治32年）、当時形成されつつあった東京の雑然とした状況、これに対する明治政府の問題意識の欠如、新首都東京建設にかける目的意識の希薄さを憂いて、首都東京への熱意をほとばらせて一気に書いた論文である。

ちょうど、いま、100年を経た今日においても、これを読み返すと、立派な優れた首都にかける露伴の熱情がひしひしと伝わってくる。

体系的に練り上げた学術論文ではなく、理想主義者の露伴らしく精神論が勝った投書的な一種独特的の都市論であるが、当時の都市の状況、抱えている問題点等が如実に分かり、興味がそそられる。100年を経た今日においても、首都東京の混沌と、猥雑さは、露伴が悲憤慷慨した状況から、悪くなりこそすれ、ほとんど改善されておらず、「一国の首都」の指摘は、今でも、都市行政に対する鋭い批判になっている。

国主導型から市民主体で都市づくりを考える時代になって、都市や首都への市民の愛情を訴えた「一国の首都」の現代的意義を考究する。

## 2. 当時の首都東京の状況、明治政府の都市政策

維新の大変革も一応収まって、本腰を入れて、都市づくりをしていかなければならぬとして、明治政府が我が国最初の都市計画制度ともうべき、東京市区改正条例を制定したのが1888年、大日本帝国憲法発布が翌1889年であるので、近代国家、近代的な首都を造るための基礎的な作業がやっとそのころから、着手されたと考えてよい。当時の日本は、国力が貧弱で市区改正条例制定時においても、いわゆる本末論（芳川顕正（当時の東京府知事）等根幹的な道路、河川等の整備を先行すべきとの論がなされたり、貧民の裏長屋が近代都市を形成する上で、衛生上大きな問題とされて富裕層の住宅地とこれは分離して郊外に出すべき等の論さえ出ていたくらいである。

## 3. 「一国の首都」で露伴が訴えたこと

評論「一国の首都」で幸田露伴は、江戸から東京へ転換し、それなりに首都の新しい形態が形成されてくるについて、理想主義者の露伴にとって見逃すことができない状況が展開しつつあると痛感し、広く世に警鐘を鳴らそうとしたようである。当時、蔓延した浅薄な欧化主義を嫌って、伝統文化の再評価を訴えている。「江戸児の江戸を愛重せる實に深厚といふべきならずや」と江戸と江戸を愛した市民を評価し、それに比べて東京が著しく堕落したと嘆き、首都に対する愛情に欠けた明治政府の施策を

表-1 明治32年前後の社会情勢等年表		
	社会情勢	都市整備関連
1853(寛永6)	アメリカの黒船浦賀来航	
1860(万延元)	威脅丸で遣米使節団派遣	
1862(文久2)	生麦事件発生	
1868(明治元)	9月8日明治と改正	
1871(明治4)	廃藩置県 実施	
1872(明治5)		新橋-横浜間 鉄道開通
1873(明治6)		京橋以南の大通り「煉瓦街」が完成
1876(明治9)		上野公園 開園
1877(明治10)	西南戦争	
1878(明治11)	パリ万国博覧会	神田黒門町火事跡地計画、火災保険制度
1879(明治12)	東京府会開会	
1880(明治13)		日本橋宿屋火事跡地計画
1881(明治14)	自由党結成	神田橋本町スラムクリアランス計画 木賃宿の立地制限 東京防火令
1884(明治17)	自由民権運動	市区改正条例意見書（本末論）
1887(明治20)		<東京>宿屋営業取締規制
1888(明治21)		東京市区改正条例
1889(明治22)	大日本帝国憲法発布	森鷗外論文
1892(明治25)		<東京>漁獵化成場取締規制
1894(明治27)	日清戦争勃発	
1895(明治28)	日清戦争終結	
1899(明治32)		幸田露伴「一国の首都」
1900(明治33)	治安警察法施行	
1901(明治34)	社会民主党結成	
1903(明治36)		<東京>宵物取扱場規制 <大阪>内国勧業博覧会
1904(明治37)	日露戦争勃発	
1905(明治38)	日露戦争終結	<東京>貧民長屋建築取締規制
1907(明治40)		<東京>長家構造制限
1908(明治41)		<大阪>街路の拡幅

痛烈に批判している。東京は、往時の江戸に比べると市民、国民に愛されていないと断じ、都府を善くしていこうとするならば、まず都府への愛情を持たねばならないと説く。「自覚せよ、愛せよ」という言葉が何度も登場する。東京が江戸に比べて有形において進歩した理由は、人民の都に対する愛情の結果というよりは、世界に影響されて成されたものと評価すべきと述べている。従って、日本文化の良き伝統とは無縁にただ外見的に見栄えのするヨーロッパの事物を真似しているだけと精神主義的な観点から当時の都市化の状況を批判している。一種の興奮状態で一気に書いており章節もないで、読み難いが、論の展開は精神論から始まって都市のあらゆる部門に及んでおり（表一2）、極めて該博な知識の裏付けのもとに鋭く適切な意見が各所に散らばっていて、読むうちにその歯切れの良さが心地良く現代の私達に通じてくる。

露伴は、当論のなかで、都市の「厚さ」なるものの、すなわち単位面積当たり実質の富みの多寡を重視し、都市はコンパクトでなければならないと力説している。猥雑なものを非常に嫌い教育上悪影響を及ぼす施設を幼稚園等の近辺から排除すべきと主張し、土地利用の区分、東京市と郊外との区分に非常に拘り、現代の線引きの思想に極めて通じる論を展開している。

江戸時代の厳しい身分制度がなくなり、人々が比較的自由に土地を選べるようになったが、都内の各種の事物の配置は、まずは個々に考究するけど、周囲に及ぼす影響甚だしきものは「情理の許すところの制度を立てて、都市の手に委ねるべき」としている。また「公園は都市の肺臓なり」と緑の公園の空気の変換代謝、精神的な効果を強調する。江戸のような人民に愛された都府を理想として、高貴な精神を貴び、都市の諸事象を批判するに当たってもこころを重視している面が大きい。極めて理想主義的であるが、露伴が強調している都市計画の根底はまず市民の都市への愛着であるという点は、いまも私どもにも強く訴えてくる。

首都の形成・発展に重要で欠かせない鉄道と、港湾に一切触れていないのが特徴的であるが、元々物理的な都市の構成を論じようとしたのではなく、身辺に感じたことから義憤を感じてだんだんすべての分野に論を広げていった経緯から、大きな鉄道と港湾についてはかえって落としてしまったのかもしれない。しかし、実際の都市計画においても、この2つは、先決的に別格として都市計画の論議から落ちている場合が現在でも多いから相通じるところがある。

#### 4. おわりに

露伴が強調した首都や、都市計画を考える場合の愛情や誇りの重要さは、100年を経たいまでも心に強く響くが、国や都市や企業や個人が繁栄して行くためには、都市という場所や景観への愛着が、機能の向上へと繋がっていく必要性も本論文を読んであらためて認識する。

#### 参考文献

- 1) 幸田露伴：『一国の首都』、初出新小説 1899.11（岩波文庫 1993.5）, 2) 本間義人：土木国家の思想、日本評論新社 1996.9. 3)
- 石田頼房：森鷗外の都市論とその時代、日本評論新社 1999.6. 4) 藤森照信：明治の東京計画、岩波書店 1990.3. 5) 東京都都市計画局編：東京の都市計画 100 年、東京都情報連絡室 1989.9

表一2 一国の首都で論じている都市施設一覧表

	一国の首都	首都圏 基本計画	東京都 都市計画	高知県 都市計画
道路	○	○	○	○
駅前広場		○	○	○
都市高速鉄道		○	○	○
駐車場		○	○	○
自動車ターミナル		○	○	○
空港			(有)	(有)
軌道		○	(有)	(有)
港湾	○	○	(有)	(有)
公園		○	○	○
緑地		○	○	○
広場		○	○	○
墓地			○	○
その他の公共空地	○	○	○	○
水道	○	○	○	(有)
公共下水道		○	○	○
都市下水路		○	○	○
流域下水道		○	○	○
汚物処理場		○	○	○
ゴミ焼却場		○	○	○
その他の供給施設			○	○
その他の処理施設			○	○
市場	○		○	○
と畜場			○	○
河川		○	○	○
運河			○	○
その他の水路			○	○
学校	○	○	○	○
図書館		○	(有)	(有)
その他の教育文化施設		○	(有)	(有)
病院		○	(有)	(有)
保育所		○	(有)	○
その他の医療施設			(有)	○
その他の社会福祉施設			(有)	○
火葬場			○	○
一団地の住宅施設		○	○	○
一団地の官公庁施設			○	(有)
防潮堤		○	○	○
防火槽		○	○	(有)
河川堤防		○	○	○
公衆電気通信の用に供する施設		○	(有)	○
防火施設		○	○	○
地滑り防止施設			(有)	○
砂防施設		○	(有)	○
流通業務団地			○	○

注：(有)は、都市計画決定はしていないが、都市施設としては存在しているもの